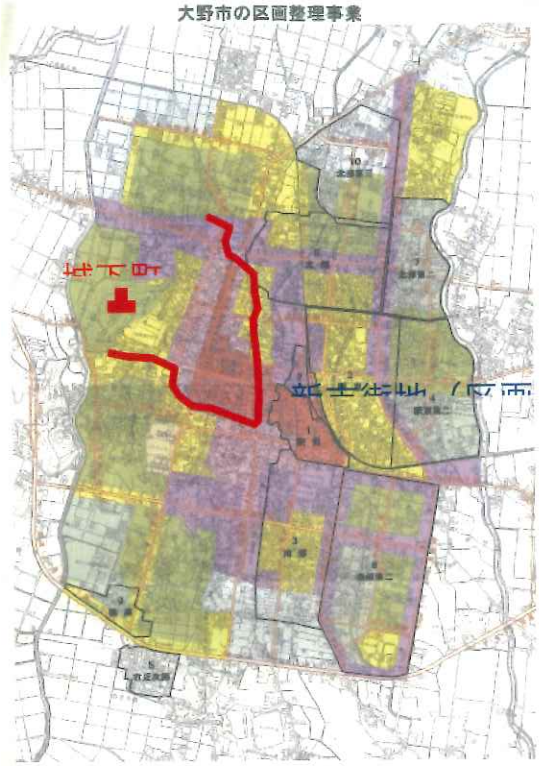
2017 年度

越前大野活動報告

関西大学環境都市工学部
住環境デザイン研究室

■活動の目的



1）大野の市街地
大野市の現在の市街地は、城下町である中心市街地、区画整理事業を行なった新市街地があります。

平成22年の国勢調査では、その人口はそれぞれ次のようになっています。
中心市街地；2221人（746世帯）
新市街地；4750人（1576世帯）

いずれの市街地も平均世帯人数3人、人口密度32～3人/haでした。
※DIDは40人/haです。

このことは、一見問題がないように見えますが、中心市街地と新市街地は、建物の立ち方が異なっており、住まいが立ち並ぶように街並みができている旧市街地では、街並みや街のにぎわいを維持できない人口になっているということです。

旧市街地に人を呼び戻す必要性があります。

2）活動の目的
私たちは区画整理事業を行なった新市街地に方々に、旧市街地の大野らしさを伝えるパンフレットを4回発行します。

市民の旧市街地への関心を高め、旧市街地に住むという新しいライフスタイル・新しい住環境価値知らせることを目的としています。

① 関大生の大野での活動を知らせる
② 関大生の目を通して旧市街地（城下町の地域）の魅力を発信する
③ 特に市街地の半分を占める区画整理事業地区にお住いの方々に伝える

2018年　春号・夏号・秋号・冬号の発行
各号のテーマ（仮）
1. 大野の商店街　今商店街の果たしている役割・・・「結（ゆい）」
2. 水のまち　大野　湧水路 と流雪溝
3. 雪国の景観要素　サンルーム・雪囲いなど
4. （今後設定）
下記、それぞれのテーマの概要を記します。

1. 大野の商店街　今商店街の果たしている役割・・・「結（ゆい）」

このまちには、”結のこころ”があります。
結とは、「つながること」であり、「時を結ぶもの」であり「恵みを受けること」、そして「伝えること」とされています。
僕らは２日間で、そんな結のこころを感じることができました。

越前大野という城下町の特徴は、多様な商店街です。
僕らは今回、商店街に着目してまち歩きを行いました。

今の商店街は、２つの役割を果たしています。
１つ目は、地元の人の生活の拠点であることです。喫茶店でご近所さんとお茶をしたり、買い物をしたりと、地元の人にとっても機能しています。
２つ目は、観光地であることです。”天空の城・大野城”をはじめ、観光地として商店街は整備され、売り出されています。
しかし、この２つの役割が別々になってしまっていると感じました。
そこで、大野の人々が”結のこころ”を以って観光客と地元にいる結の人をつなげることができるのではないか、と思いました。

商店街の特色を調べました。
主に、機能として、そして主観的ですが一観光客としての目線から見た”結のこころ”についてです。

春日商店街は、良縁の木を中心に観光地として栄えています。
地元の人の話によると、ここは商店街としてまだ機能しているといいます。
しかし、道が狭く車道と歩道が近いことや、良縁の木の暖簾がある店が点々としてしまっていることなど、観光客としては歩きにくさは否めませんでした。
昔の話などをお聞きしているうちに自作の”良縁の木ペン立て”をプレゼントしてくれたり、調査していることを感謝していただいたりと、結の心を持ったご主人と出会うこともできました。

五番商店街は、僕たちの拠点から一番近くの商店街です。
春日商店街から続いて”美濃街道”と呼ばれる道が通っています。
道幅が広く、歩きやすい。そして、御清水が飲めるスポットがあります。
また、商店街組合が残っており、商店街として機能しています。

美濃街道

五番商店街

三番商店街

三番商店街は、一番長い商店街ですが、車通りが多く、道幅が狭いです。
地元の人の話でも、ここはもうほとんど商店街として機能していないようです。
空き地が駐車場になっているところも多く見られました。

六間商店街は、一番道幅が広く、建物のボリュームも大きな通りです。
銀行などの用途の建物が多い印象です。

六間商店街

七間商店街は、一番整備されており、観光地として売り出しています。
通りは石畳で統一されており、看板は木の板で統一。
暖かい間は朝市も開催されています。そして、オシャレにリノベーションしたカフェなどがたくさんあります。観光協会も通りにあります。このように通りとして統一されていたら、観光地として売り出していることがわかりやすく、ゆっくりと歩こうという気持ちになりました。
カフェでは地元の人と他愛もない話をしていました。

夜には大野市役所の方々や観光協会の方々などにお集まりいただき、ご飯を一緒に食べました。
そうして歩み寄ってきてくださる姿勢も、結のこころを感じました。

この調査を経て、拠点で何ができるかを考えました。
３つの軸があると考えます。
１つ目にそれぞれの商店街が関わり合い、結の人たちがつながるような場所。
２つ目に商店街の人をはじめ大野の人と観光客が仲良くなれるような場所。
３つ目に、大野の人たちと私たち学生が関わり続けられるような場所。

この拠点を通して、結のこころを持った大野の人々のあたたかさが多くの人に伝わっていけば良いなと考えています。

2. 水のまち　大野　湧水路 と流雪溝

私たちが今回の町歩きで興味を持ち調べた事は、大野の豊かな『水』についてである。

まず大野の街を歩くと必ず目にする事ができる水路に着目し、その分布と幅を地図 に書き込み、種類や活用のされ方をヒヤリングした。

水路の分布と幅を書き込んだ地図

1) 水路について

大野に流れる水路には２種類ある。

一つは地下からの湧水を利用したもので、古くから 残っているものが多く、幅は約３ｍほどで、透き通った水が流れている。所々に水面へ降りられる階段と踊り場のようなものが備え付けられており、綺麗な水と、水温が年中を通して１５度という暖かさのためから、昔はそこで赤ちゃんのおしめなどを洗濯するのに使われていたという。現在ではあまり利用されておらず、湧水路は雪かき後の雪を落とすのに使われている。農機具などを洗っている人はいるようだ。（集落地に多数あり）

集落池を流れる湧水路　洗濯できる場所

もう一つは雪かき後の雪を落とすために作られた流雪溝と呼ばれるものである。幅は５０cm～８０cmほどのものが多く、赤根川から引いてきた水が道の両側に沿って通っている。水路が交わる十字路などでは 水門を使って水の順路を分けている。金属格子のふたは自由に開閉できるようになっていて、市民の方々が主体的に雪かきをしている様子が伺えた。そこでは雪かきソリの下に滑りを良くするために雪を敷くなどの工夫も見られた。

水の順路を分ける水門

流雪溝はどの家にも面していて、小さい道にも巡らされていたことから、大野の人々の生活にとっては無くてはならないものである事がうかがえる。大きい道には太い水路が流れていたが、中には幅１０cm、２０cmほどしかないものもあり、その近辺に住む人々は大量の積雪が出た時に遠くの水路まで運ばないといけないのかと思うと大変である。

2)湧水の利用

大野の町には他にも湧水を利用した融雪法という除雪方法があり、それは３番通りに見られる。道の真ん中に通るパイプから湧水を放水し、道路の道を溶かす。

大野の湧水に触れることができるところは他にもある。公園や町のいたるところに清水と呼ばれる、地下からの水が湧き出て池のようになったものが見られる。その綺麗さは人が飲めるほどであり、イトヨのような魚も生息している。

御清水のようす

3)地下水へのこだわり

上下水の技術が発達した現在でもなぜここまで地下水を利用した生活を送るのかというと、下水を通すと震災などで地下で排水管が破断してしまうと地下水が汚れてしまうからである。また、各家庭に設置された合併浄化槽によって排水を浄化してから流せるように、 市から補助金も出している。このように大野の人々は昔から残る豊かな水源を町全体で守っている。

4)まとめ

四方を山に囲まれた盆地である大野ならではの豊富な地下水や川の水に触れられる水路や御清水を町中のいたるところで見られることはとても新鮮であった。そして、その豊かな水を昔から大事にしている大野の人々の人情はとても暖かく、醤油や羊羹などの名産が多くある事からも、『水』が人々の生活と密接に関わっている事が分かった。

3.雪国の景観要素

１．まず、私たちは越前大野のまちあるきで
雪国ならではの様々な工夫を見つけました。
このまちでは普通のことも、
雪が降らない地域に住んでいる
私たちにとっては、
珍しいものが多くみられました。
そこに焦点をあてた調査です。

２．主に着目した景観の要素
（１）サンルーム
玄関やベランダ、バルコニーなどに音が入ることを防ぐ効果もあるが、
もちろん、風除室の役割を担っている。
数多くの家でみられました。

（２）袖壁
約８０年前にたてられた長屋の写真です。
町家にみられる、屋根の軒を支えたり、
防犯や延焼を防ぐためのもの。
関西大学のスタジオにもある。

（３）雪吊り
雪で木の枝が折れることを防ぐ。
この雪吊のかたちはよくみると思うが、
越前大野ではこのかたちだけでなく、
様々なやり方がありました。

右の４つの図が、
その様々な方法を表した写真である。

（４）雪囲い
雪から人や家を守るため。
この雪囲いですが、まちをあるいていると、
様々なものが見られました。
木であったり、トタンでしていたり、色も家に
よってバラバラでした。
もう使い古して、ボロボロなものも
多くみられました。

右写真は、雪囲いがない家。
地元の方とお話をした際に、
雪囲いがないと、雪が落ちてきて、
そのまま家が埋もれてしまう
と話を聞きました。

（５）提案
冬の景観づくり
例えば、「雪囲い」
色や素材などがバラバラで景観に統一感がない
新しい家にはないこともある
古い家では長年の使用で壊れることも
このスタジオにもなく、危険！
色が目立つ色だと、それだけが浮いてしまう。

景観をこわしているのでは？

みなで景観をより綺麗に、楽しくつくることはできないだろうか。
→雪囲いを考えるワークショップをしません？
・冬への備えとして、町の人たちとともに学生たちも制作に携わります
・これからスタジオと大野が一緒に暮らしていくことを目指します。

関西大学環境都市工学部建築学科
住環境デザイン研究室
教授　岡 絵理子

Ｄ１　福本 優
Ｍ１　中村 穂希
Ｍ１　長峯 佳代
Ｂ３　植田 浩生
Ｂ３　小山 剛央
Ｂ３　嶋原 健斗
Ｂ３　清水 美沙
Ｂ３　永井 大貴
Ｂ３　永木 純平
Ｂ３　丹羽 麻友美
Ｂ３　矢吹 優明